



パック連通信

事務局：山梨県大月市御太刀 1-2-10

No.135 2025年3月3日発行
全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

TEL 0554-22-3611

紙リサイクルコンテスト 2024 授賞式

公益財団法人古紙再生促進センター主催の「紙リサイクルコンテスト 2024」の授賞式が去る3月1日（土）都内にて行われました。

当コンテストの最終審査会に毎年参加させていただいていますが、今回は、ポスター部門小学校・中学校合わせて73作品において、牛乳パックリサイクルをモチーフにした作品や牛乳パック再利用マークを表記した作品が全体の約2割を占めるという画期的な回となりました。

さらにその中で刈谷市立依佐美中学校3年の江坂蒼依さん、竜ヶ崎市立八原小学校4年川島颯記さんの作品が金賞に、また、岩国市立岩国中学校の牛乳パックリサイクルやパックマークが紹介されている4作品のうちの1作品は銀賞、2作品は銅賞に入選しました。

40年前、思い返せば牛乳パックを回収はしたものの引き取り先がわからず、最初に問い合わせをした所が、古紙再生促進センターでした。その時に「牛乳パックは禁忌品で、集めてもリサイクル先はありません。」という回答に愕然としましたが、40年を経て各地の子どもたちの意識の中に「牛乳パックはリサイクルするもの、トイレットペーパーに変身する、そしてまたその再生品を使う」ということが定着しているのだと、嬉しく思いました。

金賞を受賞した江坂さんは、「地域の資源回収に参加した時、古紙にはたくさんの種類があり、リサイクルするためには種類ごとに分別することを知りました。その時牛乳パックが資源になることを知らない子どもたちが多かったので、洗って開いて乾かしてというキャッチフレーズで牛乳パックが誰でも簡単に資源に出せることを広めたいと思ってポスターをデザインしました。」とコメントしていました。

同じく金賞を受賞した川島さんは「ポスターを描くために紙リサイクルについて調べました。1リットルの牛乳パック6枚でトイレットペーパー1個になることを知って、そのことを誰が見てもわかるように描きました。」と発表していました。



授賞式の模様



金賞受賞作品
左 江坂さんの作品
右 川島さんの作品



銀賞受賞作品
岩国中学校2年
岡迫ひよりさんの作品

紙リサイクルコンテスト2024
牛乳パックリサイクルをモチーフとした
ポスター部門応募作品の数々



紙リサイクルコンテストの最終審査に参加して思うこと

古紙再生促進センター主催の紙リサイクルコンテストには、2011年からの開催以来、毎年最終審査に参加させていただいています。紙リサイクルのイメージと言えば2000年頃までは新聞、雑誌、段ボールが主で、その業界団体の取り組みの歴史は古く、コストをかけ集めるための仕組みを築き上げてきた結果、回収率も高いものとなっています。今でこそ、その紙リサイクルの中に牛乳パックなどの紙パックが含まれていますが、回収システムは市民や、回収拠点を設置している自治体、流通、そして紙パックの受け皿となるべく設備を整えてきた家庭紙メーカーによって築かれたものであり、紙パックメーカー、中身メーカーは何らコストを負担してこなかったのが事実です。容器包装リサイクル法成立の際、紙パックが再商品化義務から外れたのも、市民が築いた既存の回収システムに配慮したこともあり、当時の農林水産省の担当室長は、容環協に対し事業者責任の果たし方を厳しい言葉で指導していたことを覚えています。

コンテストに応募してくる子どもたちでさえ、金賞受賞の江坂さんのコメントにあるように、古紙の分別徹底の必要性を作文に書いたり、ポスターで表現したりしているというのに、昨今、紙パックとアルミ付き紙パックの混合回収を紙パック及び中身業界側で進めようとしている情報が入ってきています。

未だら紙パック問題も改善がなされない状況下、なんら社会的コストを負担しないまま、また関係者との協議もないまま、再商品化義務の対象となっているアルミ付き紙パックを「紙パック」の回収ルートにただ乗りしようとする理不尽さに対し、パック連としてしっかり声を上げてほしいとあちこちから要請が来ています。

紙リサイクルコンテストの授賞式でお会いした、全原連の大久保理事長も「紙パックとアルミ付きの分別は基本である、パック連を応援するから！」と心強い言葉をいただきました。

牛乳パックの回収事業にかかわる、市民団体・福祉事業所、学校の子どもたち、またスーパーや自治体の回収拠点に牛乳パックを持参して下さる一般消費者に、紙パック業界はきちんと目を向け、混乱させないことを第一に考えていただきたいと思います。



紙パックとアルミ付き紙パックが混合してしまっている回収ボックス